

# 漂泊の俳人高橋世南

矢羽 勝 幸

## 一、世南略伝

世南の生涯を叙述するにあたり、没後まもなく公にされた二つの略伝をあらかじめ紹介しておくことにする。以後の文を読む折、その人となりがわかりやすいからである。二文とも漢文であるが、ここでは書き下し文に改めた。

### I 高野山奥の院（一の橋から中の橋の間）

句碑 天保八年（一八三七）七回忌建立

（正面）はやあとになるたゞ今ぞ花盛 世南

素芯書

（碑陰）世南、姓は高橋、名は茂正、世々信の上田侯に仕ふ。父、茂辰、京邸監と為りて没す。茂正、任を辞し、大坂に居り、六轡と号して俳諧者流たり。蓋し其の平日好む所ならん。後、世南と改め、亦、幻華と号す。頗る読書並び

に翰墨を解し、儕輩に超越する者有り。然るに性質訥邑に阿ぬる能はず。唱和は故より行脚、蓬累、自ら居を定むるに違あらざるを苦しむ。年四十三、天保辛卯三月十一日、京の寓庵に病死す。出水の長園寺の先人の墓の側に葬る。其の平生の未だ顕れざるを惜み、乃ち、為に其の嘗て吟咏する所の句を撰び上木し、別に一句を撰び、其の師素芯に乞ひ之を書せしめ、石に刻し、又、海客に囑し、之を碑陰に録し、之を高野の山に樹つ。茲に丁酉春三月十一日、即ち其の七回忌辰たり。因つて以て追悼の意を表するのみ。其の從遊の者、並びに其の句帖に見ゆる者、茲に録せず。碑表の句を揮毫した素芯は一般には桜井梅室の名で知られる高名な俳人である。天保の三大家に数えられている。文中にある「嘗て吟咏する所の句を撰び上木」したのは三年後に完成する『幻華集』三巻のことである。

## II 『幻華集』 梅居編・天保十一年刊（揀雪園蔵板）序文

（前略）居士姓高橋氏、元上田藩士為り、少にして俳体を井上士朗に学び、初め六轡と称す。後虞世南の人と為りを慕ひ、乃ち今の号に改む。性廉介、寡欲、夙に世と相容れざるを悟り、官を棄てて浪遊し、江勢の間に徜徉して毎に其の土の名流の争ひ延く所と為る。終に廬を京師に結び、幻華と曰ふ。超然として自ら楽しみ軽しく人と交わらず。天保二年辛卯季春病みて没す。時に年四十三。妻子を蓄へず、主人兄弟に遺言して曰く、死すとも計ぐるなかれ、墓、碣とするなかれ、特だ竹一竿を植えば、則ち足ると。（下略）

文中の兄弟は『幻華集』を編集・刊行、高野山の句碑を建てた京都の世南門人平塚齋堂・梅居兄弟のことである。

右の二文を要約すると、世南は本名を高橋茂正といい代々信濃上田藩に仕えた。父は京都屋敷留主居役であった。父の没後、脱藩、俳諧をもって大坂あるいは近江・伊勢の地を漂泊した。俳諧は若年時より嗜み、名古屋の井上士朗、のち京都の桜井梅室に師事した。初号を六轡、のち世南という。世南は唐の文人虞世南を慕つての号である。生涯独身、超然として世におもねらず、軽々しく人と交際しなかった。天保二年（一八三一）三月十一日京都の寓居で病死した。享年四十

三。左京区千本出水通りの長遠（園）寺に葬った。

## 二、先祖について

世南の先祖について上田藩松平家の家臣文書『明細』よりまとめるとおよそ次のようになる。

高橋家は京都府亀岡市（当時亀山）の出身らしく、延宝年間（一六七三—一八〇〇）時の亀山藩主であった松平忠晴によって足軽に取り立てられた。松平家はのち武蔵岩槻、但馬出石と転封を重ね、忠晴の子忠周の代、宝永三年（一七〇六）に真田、仙石の後を引き継いで信濃上田に入城した。高橋家も足軽として上田に移った。当時の当主は世南の曾祖父に当る人らしいが、享保十七年（一七三二）には御徒士格に昇進、祖父与兵衛も忠勤に励んで中小姓、納戸役と着実に出世、明和五年（一七六八）には八十石取りで御次目付に昇格している。安永六年（一七七七）には、七十石で父与兵衛茂辰が家督を継ぐがこの人もまた勤勉な人であつたらしく、寛政三年（一七九一・世南三歳）五月には八十石で京都屋敷の留主居役、京都足軽支配の要職に就いた。京都屋敷は、七本松下立売下ルにあつた藩の屋敷の一つで松平忠周の京都所司代就任（享保二年～九年）の折に設けられ、以後幕末まで維持された。小藩を除く多くの藩が京都に藩邸を設けているが、これは藩士に儀礼式典を学ばせ、寺社や有力公家と関係を持ち、主君の官位昇進に便宜を計らつてもらう目的があつたからである。父茂辰はその京都屋敷の管理者であつた。上田生まれの世南が後年はるか遠く京・大坂を中心に活躍する端初は父のこの転勤にあつたのである。

父は寛政十一年（一七九九）には二十石の加増を得、百石取りのまま文化五年（一八〇八）五月一二日、六十歳で京都に病没した。

### 三、第一期

寛政元年（一七八九）の出生から文化六年（一八〇九）の脱藩までを第一期とする。文化六年は世南二十一歳である。出生地は旧長野県上田市末広町である。同地はかつて厩裏うまらといわれ、藩主の屋敷（現上田高校）の東南に隣接し、火急の役を担った家臣の住居や藩主の馬屋があった。高橋家は現在上田高校内の食堂と真向う位置、現住者名でいうと半田・牧野・今井・小野沢・平林・宮本の六軒を含む位置にあった。<sup>①</sup>世南がここにいたのは一歳から三歳までのわずか三年間で寛政三年五月には京都に引越している（『明細・断絶家』）。京都における住居は上田藩邸であったと思われる。藩邸の敷地は四〇〇二坪であった。以下年譜式に叙述する。

寛政六年 一七九四 六歳

○十一月六日。世南の祖母が六十八歳で没した。京都の菩提寺長遠寺の過去帳に「高橋与兵衛母」とみえる。

享保二年 一八〇二 十四歳

○一月「被召出三人扶持」（『明細・断絶家』）。父の見習いとして召し出された。この頃世南はすでに俳諧の嗜みがあったと思われる。既述『幻華集』の序に「少にして俳体を井上士朗に学び、初め六轡と称す」と記されている。士朗は名古屋に住む医家で「寛政の三大家」と称される著名な俳人であった。主として文通による指導と思われるが名古屋に行ったこともあるであろう。六轡の号は士朗の命名か、出典は『詩経』小雅のうち「皇々者華」である。

十代に作ったと思われる世南の作品が信州伊那の中村伯先編『坎水園随筆』巻七にみえる。

はしぐれハしぐれをれする浅茅かな 六轡

水仙や山は不動の戸のあく日 〃

小さかづきめぐるややがてちどりの夜 〃

かや原へ籠相に出たりふゆの月 〃

実のところ同書（巻七）の成立時がわからない。巻八は天明四年（一七八四）から寛政八年（一七九六）以後の作品を収めるからである。巻七がもし天明三年以前の作品を収めるとするならば、それは世南の出生以前ということになる。巻七の中にも寛政、文化初年の作品が混在しているのであろう。

文化三年 一八〇六 十八歳

○義仲寺刊・祐昌編『時雨会』に入集。同書は芭蕉追悼集。「四来奉納」の中に

枯尾花時雨ゝものゝはじめなり 六轡

皇都

○二月二十六日。世南の姉と思われる人が他界、長遠寺に葬られた。同寺の過去帳に「春光院花臯自薰大姉土葬、高橋与兵衛の娘」とみえる。

○俳人短冊模刻集『鳳鳴帖』に「信州上田 高橋氏」として入集。

夕やけのほどなく秋の月夜かな 六轡

文化四年 一八〇七 十九歳

○二斗庵編『犬ざくら』に入集。

深山木の薪をもれて山ざくら 六轡

洛

○七月十七日付、西尾武陵宛て僧羅城書簡に「京師茂良、六轡と申二子、殊之外出情にて月二五、六度ツゝの文音詠草下

り候。小言をいろ／＼申遣し候。」の一文がみえる。羅城は名古屋駿河町の光蓮寺住職で世南の師井上土朗に師事した。その縁で世南も指導を仰いだものである。茂良は清瀬昌雄といい京都の俳人で葎庵とも号した。この年茂良は『琵琶袋』という俳書を刊行、次の世南の句を収める。

苧こミし藻屑花咲雨夜かな

六轡

○同じ句が同年升六の刊行した『文化丁卯二葉集』に入集する。

刈こミし藻屑花咲雨夜哉

京  
六轡

住よしの松のひまさへ秋のくれ

秋風は絶て野分の夕かな

鹿の声枯木のうへの月夜哉

秋の夜やいくらもならぶ松の影

人のすむ限りハ寒し山のおく

○同じく大坂の升六が刊行した『発句二葉草寅卷』に八句が入集する。

夕けぶる初瀬は絶ぬ霞かな

京  
六轡

はる雨やちら／＼ミゆる山の藍

はるの雁けしきもなくて立さワク

深山木の薪をもれて山桜

朝がほの露吹ほどけはしすゞみ

行人の影より降るやくれのゆき

かれ萩を箸にも折らず河豚汁

かくばかり月八夜をてる師走哉

文化五年 一八〇八 二十歳

○「親与兵衛故障之節石代相勤可申旨、文化五辰正月十五日御給金並之通被下」(『断絶之分明細』)。同書の「高橋源三」の項である。源三は世南の通称である。「親与兵衛故障」の具体的なことはわからないが、この年九月十二日父与兵衛は病死しているので公務中倒れるかして、世南が代役を務めたのであろう。

○九月十二日。父病死。長遠寺に葬る。法名竜源院雲帯義耕居士。法名の中に「雲帯」の二字があることから上田の俳人成沢雲帯(白雄門人)と混同した書(高橋月巢編『当時現在俳諧師人名録』)もあるが誤りである。世南の父は俳諧の嗜みはなかった。

○「同年(文化五年)十一月家督。八十石。勤向是迄之通」(『断絶之分明細』)。父は百石であったが、世南は八十石で京都屋敷留主居役、京都足軽支配を引き継いだ。

○俳書『歳旦呉竹風雅』及び『宵月文事』に六轡として入集。

○琴州編『みのむし』に入集。

菜の花や昼から下る鳶からす  
洛 六轡

○前柿壺紀梅価編『俳諧花鳥目付集』に入集。

おきあがる萩よりふとき日ざし哉  
六轡

○祐昌門人編『霜のかね』に入集。

月雪や一夜の後ハ雪にして  
山城 六轡

○眉山編『身籙集』に入集。

若葉して山田の蛙啼さかり

六轡

文化六年 一八〇九 二十一歳

○漫々編『ふるしも』に入集。

苜こみし藻屑花さく雨夜哉

六轡

○松兄編『名なし草』に入集。

菜の花や昼から下る鳶鳥

六轡

○梅室編『己巳四時行』に入集。

負あまる草を一夜の蚊遣かな

六轡

○十一月。「母、家来俱ニ出奔、断絶」(『明細・断絶家』)。家督を継いでから丁度一年後に母・家来とともに脱藩、家は断絶した。高野山奥の院の句碑では「性質訥邑に阿ぬる能はず」とその脱藩の理由めいたことを記しているが、おそらくは管理能力の欠如、俳諧執心が原因ではなかったか。

#### 四、第二期

文化六年十一月脱藩以後、近畿、西国各地を漂泊、文政五年(一八二二)十二月、京都富小路錦小路上ル西側に定住するまでの十三年間である。

文化六年 一八〇九 二十一歳

○文化八年一月二十二日、丹波の西尾武陵に宛てた手紙に文化六年の脱藩以後を述べて次のように記す。



(前略) 其節がわたくし事子細御座候て、当時浪々の身分ニ罷成、風流一まきの男に相成候。其節ゆへに甚取込、御返事も不申候段御免可被下候。夫よりはり名古屋へ罷越、はいかい興行、旧冬押つまり帰洛、梅室雪雄かたに罷有候。(下略)

脱藩後師士朗のいる名古屋に行き、文化七年十二月頃まで滞在していたことがわかる。「旧冬」は文化七年冬である。

文化七年 一八一〇 二十二歳

○芝居見立人気俳人番付に京都六轡として入集。しだいに名声が上ってきている。

○京都の俳人梅室の伝記『梅室翁紀年録』の文化七年の項に「世南、布施丸同居」と記載。前述の文化八年一月二十二日書簡中に「旧冬押つまり帰洛、梅室雪雄かたに罷有候」とある点と符合する。雪雄は梅室の前号。母とともに脱藩したというが、母も梅室のもとに寄寓していたのだろうか。

○信濃の素壁編『続草枕』に入集。

山住のはじめなるらん竹植る 京 六轡

○井眉編『華鳥文庫』に入集。

人の来る野とは見えたる桔梗かな 洛 六轡

○竹斎編『句安奇禹度』に入集。

秋の夜や人の住るゝ竹ばしら 行脚 六轡

○俳書『小菊原』に京六轡として一句入集。

○秋笈編『ことのばら』に入集。

鶯に木の葉衣を振ひけり 京 六轡

○奇淵編『俳諧四季並題』の上段巻初に「文化七年九月廿六日浮瀬亭興行」として奇淵（発句）釣翁、六轡ら一順歌仙を収む。また同書の旧『松風会』に次の発句が収録。

茶畠に寒ミをつけてうつ砧 京 六轡

いくすぢもみどりを持て枯柳 六轡

同書中、旧『花市会』に次の発句を収録。

遠里の有ふりにとぶ乙鳥哉 洛 六轡

文化八年 一八一— 二十三歳

○一月二十二日。丹波の西尾武陵に手紙を出し、文中「春興すり物願をいたし候間、貴句勿論、御社中様方の御句御恵被下候様奉祈候。一句にても過分ニ集り申候得者、当時の都合甚よろしく候。此段御察し可候下候。」と記す。春興の出句料で糊口をしのごうとしている。

○九月。葦笠と『一夜二哥仙』を刊行。世南の処女出版であろう。タテ二十二センチ、ヨコ十六センチ一冊。四ツ目大和綴。全五丁。序、跋無し。二巻の両吟歌仙を収めるだけの小冊で葦笠（山城の人）の履歴もわからない。半丁八行書き。

文化辛未無射初三夜刻燭而成

葦笠

軒の山草の花見る迄にせし

ものゝ響は皆砧にて 六轡

左右の手膝にある時啼鶉 全

三日月細く車おす町 笠

寂として霜に落こむ楨杣 全

子をうむ猿のひとり帰るか

其二

もや／＼と見えるや荻の二所

赤豆斗でふさぐ小むしろ

夕月を真向に受る壁ぬりて

若いうちから下駄をいやがる

商ひのミぢんもすかぬ蝶の影

すツと焚ても霞む切柴

行燈を出せば椿の裏が見え

どふ思ても気ニ染ぬ縁

千鳥にも今更顔の揚られず

葎の上は雪の置也

碓にはら／＼煤の落かゝり

一分二ツですます一月

十六夜の気持にならぬ小蠟燭

砥石のかけの多き蟬

馬の直が出来たる露に手を拵て

六轡

轡  
(下略)

葦笠

、

轡

、

笠

、

轡

笠

轡

笠

轡

笠

轡

笠

近江の山は皆東むく

朝風の薄縁めぐる寺の花

よ所より早う芋植付る

ニラ  
てうちんの跡先になる春の鳥

帯のあはいへはさむ銀札

海を見てからおとなしき人使ひ

枝下させる松のにしへら

年内は雨の夕べもすくなくて

ひとり／＼にわけるこのわた

質店へ半日ツゝハ手がとれる

よんべのまゝにしれぬはき物

宇治を見て頬に髪を剃たがり

うれしい時もこんな月影

朝貞の今に扇のはなされず

ウ  
小皿のめしを覗くまめ鳥

あちこちへ御酒の下りを分てやり

主がかはつて山を伐こむ

縮ものゝ法度をふれる花盛

轡

笠

轡

、

笠

轡

笠

轡

笠

轡

笠

轡

笠

轡

笠

轡

笠

轡

風の加減で遅ひ紫蕨

笠

どの鹿も腹の軽なる春のくれ

轡

はしり元から蛙鳴出す

笠

○俳人番付「新板諸国はいかいし大角力ばん付」の中央柱別格「行司」全五段中の三段一人目に「大坂 六轡」として登載。当時大坂にいたらしい。

○俳人番付「正風俳諧名家角力組」(板元長斎・柳莊・其成)の西方最下段(五段)右より二十六人目に「京 六轡」として登載。右の番付よりかなり下位である。

○素隠編『なみはやしふ』に入集。

何所ぞには若火のはての夜の雪

六轡

○乙二編『斧の柄』附録に十句入集。

梅がゝやつほみこぼるゝ清閑寺

六轡

白雪や翌はふむべき山ざくら

いかにかく残細しや野へかすむ

積のはやしにきゆるかすみ哉

遠里のあるふりにとぶ乙鳥哉

行春のひとりながるゝ小舟哉

山住のはじめなるらむ竹植る

朝がほの間にちひさし山の空

ふるさとの秋風こひしさ、げめし

着てたてば帚子にしたし鏡山

六句目「行春の」、九句目の「ふるさとの」など秀句が目につく。九句目はわずか三歳で去った故郷上田をなつかしんでいる。

○奇淵編『俳諧発句四季併題さくら苗』に「京六轡」として入集。

○奇淵編『松風会』に「大坂 六轡」として発句一、連句が入集。

○六轡号を名のっていた文化八・九年頃、『ふないち集』という俳諧撰集を刊行する。同書は半紙本一冊で二十二丁。題簽は『ふないち集』。内題等は無。刊年はないが集中師井上士朗（文化九年五月没）が入集しているところをみると文化八・九年頃の刊行であろう。集中世南の句は「ナニハ 六轡」とあり、当時大坂に住んでいた。

『ふないち集』は序・跋がなく、京都三条の菊舎太兵衛の板。半丁八行書きで一丁から七丁裏までは諸家の発句集、巻頭は京都の蒼虬。以下著名人のみを抜くと、加賀の眉山、摂津の瓜坊、広島の玄蛙、長崎の菊也、伊勢の椿堂、近江の五来・千影、大坂の井眉、長崎の天外、大坂の百堂、

家みへて扇ひろひぬこけの上 オケ 乙二

摂津の桐栖、備後の李朝、伊勢の丘高

青鷺の声の下なり淀八幡 ラク 百池

名古屋の岳轡、摂津の土川

雲の峰増賀の鉦もやれぬべし ヒゴ 対竹

夏の夜やたくも手の中胡椒の木 ナニハ 升六

七丁裏から十二丁表まで六轡中心の半歌仙が四巻ある。各表六句のみを掲げる。

朝日にはあたる合点かかたつぶり 釣翁

新茶のいろのくはつと出過る 六轡

灯心のつくり方ある山水に 奇淵

猿の音する繩をひくなり 宗樹

春雨のけぶりにならぬ月の影 轡

松のみどりのどれもほぢける 翁

四句後から延史が加わり五吟となった。

○ 満月の雪の下の在所かな 梧州

木にも草にもよらぬ鹿の尾 六轡

三度までくセのかはりし菊咲て 州

一人前なる家に物かく 州

いかいこと鴉のをりる汐尻に 州

松葉たく香のほきくとする 轡

○ 唐きびにゆられて見へる家居かな 猪菜

梨子をすかしにのぼる残月 六轡

鶺鴒の声みながくまでひやついて

籠の小海老の何ほどもなき

炭竈のいつかふへたる山の形

寒にとりつく宵からの雨

○

鳥の眼のしたしくなるや梅の花

土をあてがふ苜のくきだち

春たける山の入日に戸を明て

元結ひねる紙のすゝびる

ひやつくハ串の鯨のうごくうち

葛を曳ても月の広がる

十二丁裏から再び発句が続く。

あさがほの花にしつきき残暑哉

ことしまたかるかやハなしをみなへし

奥州の巢居、名古屋の竹有、長門の羅風

道の辺や小萩にうつるいねの虫

松の露落てあきしるひとりかな

三河の秋拳、伊賀の猪菜、

、

、

、

、

六轡

葦笠

、

、

、

笠

アキ

カキ

カキ

イヨ

ヨハリ

士朗



すむかりとうき世はなるや松の露

成美

しり顔で又わすれるやけさのつゆ

シナノ  
素檪

島にも米が出来たりなくすゞめ

エド  
木海

三河の卓池、大坂の長斎・竹斎、江戸の巢兆、大坂の三津人・空阿・米彦、摂津の一草

手から手へ米いたゞくや門の露

ナニハ  
六轡

かも川やすゞめも下りて友ちどり

サガミ  
葛三

大坂の瑞馬、近江の烏頂・芳之、大坂のろ（魯）隠

両の手の夜ハさびしき時雨かな

ナニハ  
六轡

せきれいのふむまでかれぬ池の草

ナニハ  
万和

初霜やあはれをつくす草のうへ

ハリマ  
玉屑

山城の葦笠、大坂の釣翁

炭竈をさしとぶ也夜の鶴

ラク  
雪雄

初雪といふ口へさすあさ日かな

ナニハ  
月居

寒ぎくの花といふまで松の塵

ナニハ  
奇淵

みぞるゝや雪にあれたる小笹はら

エド  
道彦

十九丁表から二十二丁裏まで六轡中心の半歌仙三巻を収録する。例によって表六句のみを紹介する。

植付る日もそのまゝに庭の竹

春哉

葎ばかりのうすき一夏

六轡

革つゞら昇バ脊負ばゆさついで

月の明りも挑灯が入

汐先や鴻と鴨とがむかひあひ

低い家ほど秋はすくなし

○

桐の葉のおくに並ぶや夏坐舖

朝の遅さを水鶏なくなり

ひらついた馬の尻尾シツテに霧はれて

をかしくなりし秋のまん中

兀くぼむところへ出たる三日の月

筋違へにつく温泉の口

○

したゝるやこの一山の夜の霧

ふすまの裾のかはる夏草

不都合にけづり上たる鞍置て

櫻欄繩の直を何べむもきく

とち餅にひやりと月の影がさし

雀の脊中へ廻るあき風

井眉

魚眼

轡

哉

六轡

比良

轡

良

良

轡

豊郷

六轡

、

郷

、

轡

半歌仙に続いて「おくれて拾ふたる句」として発句六句がある。次もその一句。

ゆふ桜花ますかとぞおもひけり

ラク  
定雅

蕪村門の西村定雅である。

文化九年 一八一二 二十四歳

○五月十六日。師井上士朗没。享年七十一。以後京都の桜井梅室の指導を仰ぐ。

○素壁編士朗追善集『信濃札』に入集。

両の手の夜ハ淋しき時雨哉

京  
六轡

○半位庵春漣編『おほさやま』に入集。

もや／＼と見ゆるや萩のほた所

六轡

文化十年 一八一三 二十五歳

○河内の俳諧堂耒耜と『俳諧新十家発句集』を編刊。内題によると当時「浪華」に居住、阿里園六轡と号していた。半紙本四冊。心斎橋通伝馬町河内屋嘉七／同北久太郎町同儀助／同所塩屋忠兵衛梓。賀茂季鷹序文（文化九年）、世南の跋がある。

いこまの山をさしのぼる月のひかりとゞめて阿里園のうちあきらかにひとつの草昏をひらく。こはくだれる世ながらこの道にのぼれる人らのたへにいひ出たるをこゝろをやるはしのたよりもなしなさすべからむと、こゝにもとめかしこにひろひて終にひとゝせのうちたちまふことのかず／＼よりさきいづる花になくとり、影きよきそらにふるものもたれり。おのれ蚊眉の中にある身、僭躰の罪のがれずとはいへちからをあはず人ありてふみひさぐ人のたすけにさへなりけり。ゆくすえハわれをもしのぶ人やあらむ。むかしをおもふこゝるならばにかく八聞からこの草昏を見ん君たちに拙

をしらしむと、やがて月ハ西山に入ぬ。

幻花六轡

この文によると編集の中心は世南で、耒耜は手助けであったことが知られる。本書は寛政十一年に刊行された『十家類題集』（屋烏編。芭蕉、蕪村ら元禄から天明に及ぶ十人の発句集）にならって寛政から文化に及ぶ代表的俳人（成美、完来、樗堂、道彦、月居、乙二、士朗、升六、蒼虬、奇淵）の発句を季語別に編集したもの。題簽は「俳諧新十家発句集」、内題は「俳諧新十家類題集」。当時世南は大坂に住んでいた。

○井眉編『華鳥文庫』に入集。

夜に入て足袋はく里の柳哉

六轡

○長斎編『万家人名鑑』巻四に入集。

六轡 松本氏 号阿里園 俗称源三

信州人来居于浪華

沖中やどの小舟からほとゝぎす

六轡

「松本氏」以外は記述が正しい。当時大坂に仮寓していた。

○武陵編『東西四歌仙』に京の人として入集。

ふところに影さし入や秋の山

六轡

○尺艾編『俳諧難波物語』入集。

故郷の米より白しうめのはな

六轡

○甲斐の有斐編『星つくり』に入集。

春の夜や藪に成たる壁伝い

京

六轡

文化十一年 一八一四 二十六歳

○松隣編『木公集』の「行脚人」の中に入集。

蕁の間にちさし山の雲(マユ)

六轡

○叡美編『さゞなみ集』に入集。

昼ならバ芦のかせなりほとゝぎす

ナニハ  
六轡

文化十二年 一八一五 二十七歳

○鷺橋編『あきのそら』に入集。

古さとの秋風恋しさゝげ飯

大坂  
六轡

○巢兆編淋山校『うきおり集』に入集。

枳のはやしにきまる霞哉

六轡

○西坡編『つつ鳥集』に入集。

山住のはじめなるらん竹植る

六轡

○奇淵編『花市会 春夏』に入集。

朝つバめ心のたかミ崩れゆく

行脚  
六轡

○有斐編『統調布集』に入集。

月かけハかくまで佗ず我にさへ

京  
六轡

○耒耜編『柳くやう』に一句入集。

文化十三年 一八一六 二十八歳

○番付「正風俳諧名家角力組」(采寿堂板)の西方三段目(全五段)の上位から十一人目(全二十二)に「大サカ六轡」として登載。

○芝山編『四海句双紙 初編』に入集。

花有としりけり雲の帰る処

行脚

六轡

○九月。『俳諧七部集』(寛政七年 筒井庄兵衛、浦井徳右衛門、野田治兵衛板の半紙本七冊)に「阿里園六轡」が朱で所々解釈を記入。巻末に「依所望七部集中秘事口伝委不残解釈／阿里園六轡／于時文化十余年丙子晚秋」と記す。

文化十四年 一八一七 二十九歳

○九月十一日。丹波の武陵へ手紙を出す。文中「当冬者御地一覽、三丹行脚之積、何れ御地へも罷出可申候。」と記す。

○同じく武陵宛ての手紙に若狭・宮津・天の橋立を詠んだ作品がある。この年か。

はじめてわかさの国に入りて

うつくしくしぐるゝ代なり城と町

宮津二水居

聞たとは莫大ぬくし与謝の冬

はしだてを産たる雪の朝日かな

橋立に丹後の国ハかくれけり

○芝山編『四海句双紙二編』に入集。

蝸牛なぐさむのミの風のあと

浪華

六轡

○巍道編『時雨の古ごと』に入集。

着て立ば紙衣にしたし鏡山

浪花

六轡

文政元年 一八一八 三十歳

○李長編『あはぢしう』の序文を執筆。

こけごろもつゝほのたもとわかちしよみとせといへるけふ萍水ふたゝびめぐりあひてくさか山の春にあひぬ。あるじ李長はいふもさらなり。たれかれは吟じ、たれだちは松下微風によりてねぶる。吟はゝるものは遠望かぎりなく連山帯に似たりといふ。おきツなみたかくしろくうちよせ、鶴鷺どものひがたとられてたちさはぎ、かたへの海人等がまがきまばらにさかなりける声々むかしにたぐへてあはれなる。其事になん睡るものはやまツの風しツかにひらきあひてしかも鳥をおどろかさず。溪水ほそくながながれいでゝいはほにむせぶおとにつれてなるべし。そが中あるじほれにあとふるにひとツの藻思をもてす。ひらき見るに清遠幽雅こゝろばせを葉のしツくにかよひてさらに煙霞の病を満し、おぼへず筆をとりけれのこをそうしの端にかく。これこの集のおもて相ミすべき時なるをや。

幻華六轡

戊寅仲春

『あはぢしう』の板下はすべて六轡の筆である。卷末近くに編者李長との両吟歌仙一卷がある。表六句のみを掲げる。

松の雪外には品もなき舎り

六轡

紙子親しき音のあるあさ

李長

から車裾野遠山めぐり来て

ひ

あびる雀の砂うすくなる

長

蟾螂のつくばふ先のあり明に

ひ

ほろ／＼椎の火にこぼれけり

長

(下略)

○御風編『俳諧法華』に入集。

浪華

六轡

雪ちるや鳩の巢ほどに住居たし

○玉屑編『湯のはな集』に入集。

行脚

六轡

夕やみや芥静まる花あふひ

○茶田編『茶の実』に入集。

五六部は門しめて寝る花火哉

世南

○其流編『清見瀉』に三句入集。

さみだれのゆるみやきつと風の音

世南

菊白うなれバ寒うも成にけり

蒔となく麦こぼしおく畠かな

○芝山編『第三四海句双紙』に淡路の人々との六吟半歌仙と発句が入集。発句は、

木の間行ば夕ぐれ白くちり椿

ナニハ

六轡

○

家はみな月さす野路の柳哉

淡路

岳竜

笹原に袖をかハすはる風

李長

雁帰るふりをたしかに橋反て

里雀



もりやむ雨の坐の静なり

六轡

眠るなら紫陽花より八百合の花

桃堂

粽四五本投こんで行

岳竜

(下略)

○成蹊編『詩宇耳隣通』に入集。

よき人の氣に似て春は立にけり

六轡

○星譜編『さかづき合』に入集。

草まくらすゞしかれとや丸い月

大坂  
六轡

○甲斐の蟹守編『花の跡』に入集。

困やふるの神杉こだまして

六轡

○師梅室の五十歳を祝って刊行した『四時行』(梅室編)に露頂との両吟歌仙ほかが入集。

松に日の出るや鶯二羽三羽

六轡

里はのこらず霞むだんく

露頂

さかづきを水にうけたる節句にて

全

組なれもせぬ丈六をくむ

轡

蝙蝠の来るしをもなき初月に

全

とくさはたげつゆのしぐるゝ

頂

(下略)

発句は

暮たかとするやふうはり浮蛙

六轡

○梅価編『くれたけ状』に発句入集。

文政二年 一八一九 三十一歳

○井眉編『花鳥文庫』に入集。

さくらより出しなるべしこの夕

六轡

○禾木編『さゝゑぼし』に入集。

木がらしや布留の神杉こだまして

山城  
六轡

○芝山編『第四海句双紙』に入集。

けふ過ぬいつか尾上のほとゝぎす

ナニハ  
六轡

○慶五編『丘象潟集』に入集。

苔水の音を出て来るちどり哉

山城  
六轡

文政三年 一八二〇 三十二歳

○竺斎編『芦陰集』に入集。

こゝにありと見ればかしこも菊の花

セツツ  
六轡

○太笈編『発句題叢』に入集。

白雲やあすハふむべき山桜

信濃  
六轡

遠里のあるふりに飛つばめ哉

信濃  
六轡

兎角して時雨草とは成にけり

六轡

「信濃」の肩書は世南に「信陽除史」という別号があることから信濃の人と誤解したものであろう。

○俳書『奉扇会』に入集。

○井眉編『華鳥文庫』に入集。

なの花や昼から下りる鳶鳥

六轡

○道尾門人編『芬陀利華』に入集。

おし水のまはるやどこもやむ砧

世南

文政四年 一八二一 三十三歳

○桂丸等編『俳諧蚤のあと』に入集。

短夜のさたにさへして隅田河

雲水  
六轡

文政五年 一八二二 三十四歳

○十二月。長い漂泊生活をやめて京都富小路錦小路上ル西側に定住。翌六年一月九日付の武陵宛て書簡に「野生旧臘富小路錦小路上ル西がハニ入庵、無異ニ致加年候。」と記す。

○吐竜編『俳諧桜仏』に入集。

うぐひすのあとに音して井戸の暮

雲水  
六轡

年次不明（六轡号）

○和月編『筆のしみづ』に序文、連句集入集。

あはれ日のかげ月のかげくまなくてらしてわれひとのおもひをのぶるひとふしのたねをますにぞ。おのれ和月のぬし

いまだいくよなんともいはざるさきよりまじはりあつくものいふふしくにもひごろかたらふはいかいのみちなをおくふかくわけり、かたみにたくらべむなどうらなくかたらひしそのころより集つくれんころざしいとねもごろにしあれどひまなくてやみけむ。つひにあまたとしをへて幾夜庵よ詞宗よとて人のもてはやすほどになり給ふぞかしこし。さきにちぎりおけることたゞにやみなむやとこたびしうつくらる。おもはずもわが世うくもすてわびてあまつさへちかくはやまふしげくうちふしがちに山ざとに月日のかさなれるその中へ撰集のなれるよしきこふる。うれしさにみじかきさへつたなきこゝろをうちわすれさきにちぎりしことよしをいひツのり、はしたなくも乞得てはじめにするす。たきゞこる山がツにはをこのわざならずや。

発句は

俳諧百揆六轡

良夜幾夜庵にて

何事も無げなり山を出る月

六轡

歌仙は表六句のみを掲げる。

蝙蝠やあかぬこゝろに風の吹

和月

やまほとゝぎす訪も折く

士明

むら竹の雫のたき火広がりて

竹窓

磯輪のうめを折持にこそ

六轡

きさらぎの月を□／＼ながめ出し

希堂

立舞ふてふの連哥也けり

斗南

以下瓜洲、鷺橋、正雄、何閑、止齋、狭田の十二吟である。

○井眉『華鳥文庫』に入集。

夕露のあかりに入りぬ雲の峰

六轡

○短冊

生涯にいくたび月の杜鵑

六轡

うめの白さびし／＼と身にこたへけり

六轡

残月のけふともしらずうめの花

六轡

草庵歳旦

これを見よ蘿つたの小窓に足れる春

六轡

とく／＼と鳴るばかり也磯の梅

轡六つた

いかにか／＼腕細しや野道かすむ

六轡

○沙村宛六轡書簡一通。九月十日付。天理図書館蔵。

○京都の茂良編『常盤樹』に六轡の連句（二十句の付合）と発句一が収められている。連句は

これとても常盤草也芹薺

漢水

を発句とする一人一句、二十句の付合で師の梅室（雪雄）の一句もみえる。

はらミ雀の朝餌まツ声

柯山

島山にもいふ春のなくなりて

六轡

扇ひらけばなツかしき草

執筆

以上で付合が終わっている。発句は

穂芒にうたるゝ朮を曲にけり

行脚

六轡

○『幻華集』に老母と近江土山に移住した句がある。

老母の住よからん方にと聞へしまゝ蟻園をあふみの土山にうつして

おやと子が梅の下道つくりけり

土山にて

眼がれたる鈴鹿に□菊のうへ

土山には名僧虚白(常明寺住職)がいたが世南も虚白の庇護にすぎたのだろうか。

○編者不明『わすれぐさ 春』に「六轡 浪花蟻園」として一句入集。

木の形に日影を持って梅(の)花

六轡

○井眉編『華鳥文庫』に入集。

春の夜やあてにして行柞原

洛

六轡

遠里や風にさだめるけしの花

沖中やどの小舟からほとゝぎす

○乙人編『葛芽』に入集。

さびしみに落てをかしきくひな哉

洛陽

六轡

○編者不詳『柴神楽』に二句入集。

梅がゝやつぽミこぼるゝ清閑寺

京

六轡

行はるのひとり流るゝ小ぶねかな

○番付「南澹部州大日本国俳諧相場定所／大阪」の左の方二段目（全八段）の二人目（全十二人）に「ナニハ 六轡」とみえる。左の方のトップは月居、二段目のトップは師の雪雄である。

○番付「新百韻略式」の右方三段目（時鳥の項。全五段）の二人目（全八人）にランクされる。

○六轡編摺物「題閑神」。切紙形式一枚摺。

親の親も並ぶやうなり草の露

六轡

卷末

こゝにありと見ればかしこもきくの花

編者  
阿里園

○篤老編紅葉一枚摺に入集。

小坊主やまツが枝ふんでけふの月

六轡

○杜蓼編夏興一枚摺に入集。

けふ過ぬいつか尾上のほととぎす

六轡

○星譜・奇淵編春興一枚摺に入集。

春の夜やあてにして行柞原

六轡

○江戸深川念々舎発行番付「日本俳諧師隱者天狗録」に「大坂 六轡」が収録。

○「諸国はいかい師相撲勝負負」の三日目に「京六轡」と「アキ玄蛙」が対戦、六轡の勝ち。

〔註〕

- (1) 天明三年の上田藩士邸絵図によると「高橋与兵衛」（世南の父）の邸は表十四間三六、奥行四十間、裏十五間三六あった。
- (2) 大谷篤蔵編『武陵来簡集』（西尾精一刊。昭和五十一年刊）。以下武陵宛て世南書簡も出典は同一書。